

市川九女八年譜稿 (三)

佐藤 かつら

本稿は女役者市川九女八（一八四四ごろ―一九一三）の年譜を作成するものである。これまで発表した「市川九女八年譜稿（一）」（『パラゴーン』第三号、二〇一六年三月）、「市川九女八年譜稿（二）」（『パラゴーン』第五号、二〇一八年三月）では、九女八の生年から、明治十年（一八七七）までを追った。未だ調査が不十分な点があるが、今後補足することとし、本稿では、明治十一年および十二年の九女八について以下に述べる。「年譜稿（二）」においてみたように、明治十年九月、警視局は東京の劇場における女子演劇興行を認めた。それに伴い十一年には女役者の一座による興行（「女芝居」とする）が多く見られる。本稿では九女八の出演履歴に加え、女芝居についても意識的に取り上げることとした。

【凡例】

九女八に関わる事柄は「●」、その解説は「■」を付けて示した。その他本稿において必要と思われる事柄は「▽」、その解説は「□」

を付けて示した。名前を市川九女八で統一して記しているが、本稿の対象とする期間は岩井糸八を名乗っている。そのため、各興行記録内においては、「九女八（糸八）」などと併記した。また、興行記録においては配役も記したが、九女八以外については主な役者に止めた。役名は、特殊な場合を除いて、河竹登志夫監修・古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典』（白水社、二〇〇六年）などを参照し、通行の役名で記した。

年譜稿に引用した文献の詳細は次の通りである（著者五十音順）。年譜稿中では書名または略称で示した。新聞資料は、年譜稿中では「新聞」の文字を省略した。資料所蔵先については、早稲田大学演劇博物館を「演博」と略した。

引用資料は現行字体に改め、適宜句読点、濁点を補った。また、原資料にある振り仮名は、適宜省略して記した。原資料には無いが、私に振り仮名を振ったり漢字を当てたりした場合は、「―」で示した。引用資料の傍線部は筆者による。

〈先行研究・文献〉

倉田喜弘『明治の演芸(二)』(国立劇場調査養成部芸能調査室、一九八一年)。

倉田喜弘『芸能の文明開化―明治国家と芸能近代化』(平凡社、一九九九年)。

倉田喜弘・林淑姫『近代日本芸能年表』上(ゆまに書房、二〇一三年)。

小宮麒一編『歌舞伎・新派・新国劇 上演年表 第六版(明治元年〜平成十八年)』(私家版、二〇〇七年) ↓ 『上演年表』と略す。

小宮麒一編『歌舞伎・新派・新国劇 配役総覧 第七版(明治元年〜平成二十二年)』(私家版、二〇一一年) ↓ 『配役総覧』と略す。

守随憲治記「市川九女八伝聞記(二)―ある女役者の口述―」(『実践文学』四二、一九七一年三月) ↓ 「伝聞記(二)」と略す。

〈雑誌・新聞資料(五十音順)〉

『安都満新聞』(↓明治十二年十二月より『いろは新聞』)、『かなよみ』、『歌舞伎新報』(明治十二年二月創刊)、『劇場新報』(明治十一年六月創刊)、『市覇威新聞』(明治十一年八月創刊、十月終刊)、『朝野新聞』、『東京曙新聞』、『東京絵入新聞』、『東京さきがけ』(↓明治十一年十二月十七日より『東京新聞』)、『東京日日新聞』、『なまいき新聞』(明治十一年六月創刊↓明治十一年十月二十六日より『芸術叢誌』、明治十二年六月まで)、『真砂新聞』(明治十一年七月〜八月のみ現存)、『郵便報知新聞』、『横浜毎日新

聞』(↓明治十二年十一月十八日より『東京横浜毎日新聞』)、『読売新聞』

○明治十一年(一八七八) 三十三〜三十五歳⁽³⁾

三月に桐座で女芝居が始まった。九女八の動向は六月まで明らかではない。桐座、栄升座といった、官許劇場の中でも中心地から外れた場所に位置し、不振に陥っていた劇場において、女芝居が行われたことがわかる。栄升座は榮昇座とも表記されるが、本稿では「栄升座」に統一する。

▽三月一日より 四谷荒木町・桐座で名古屋の女役者が興行。

絵本番付あり(演博所蔵、所蔵番号ロ331724。日付は明治十一年二月廿八日)。初日は三月一日付『朝野』による。

「絵本大当記」、『紫山影隅田川浪』、浄瑠璃「両顔月姿祝」。

光秀・法界坊ほか||力枝、春永・孫市・十次郎・甚三||小光、正清・要助・松若||力代、桔梗・おくみ||辰次、操・おしづほか||大吉、その他省略(絵本番付)。

□「東京初の歌舞伎、新富町・近源亭が金主で名古屋の女役者が桐座へ乗り込む、狂言は「絵本太功記」(「読売」)。(『近代日本芸能年表』上、三七頁)。明治十年八月十日に四谷左門町に住む民谷弥平太から女性の一座による演劇興行が願され、その後関兵衛からも願があり、同年九月、新たな劇場建設は認められなかったが、興行自体は苦しからずとのことで許可された(『芸能

の文明開化』、三二五頁)。この出願と許可が実を結んだ興行で、興行主は民谷、金主は新富町の近源亭という会席料理屋であった(同書、三二五頁)。二月二十六日に名古屋から女役者がやってきたが、民谷弥平太の家の座敷に安置されたお岩稲荷(4)に白米三俵、酒一樽、金十五円を奉納し、牛込榎町の大法寺から僧侶が来て舞台繁昌の祈祷などを行い、さらに酒盛りをしてから桐座へ乗り込んだという(三月二日付『東京絵入』)。この興行では、赤坂の芸者五人が花道に並んで褒め詞を述べたという(三月二十日付『かなよみ』)。三月二十日付『かなよみ』によれば、光秀を勤めた篠塚力枝は「例の藪(5)から出た仕打は故人海老蔵と小団次の処もあつて中々能(6)するといふ」とあり、「市川光江」(光江は見当たらず、小光のことか)については元は名古屋の芸者で、中頃市川九蔵の妻になったとある。同紙によれば、「一座はいやみなしの狂言で人形芝居の傍(7)があるといふ」が、「景気は極(8)よいが見物は薄い様子」であった。

▽四月はじめ 神田連雀町の「白拍子座」で岩井糸治らが興行か(四月五日付『読売』)。

「天照太神(9)の窟(10)」、「牛若丸吹笛(11)の段」、「頼朝七騎落」、中幕「寛政年間柳営美談」、切は「前々太平記」、「楚国孝子盗羊の訴へ」。

□倉田喜弘氏『芸能の文明開化』三二六頁に指摘がある。岩井糸治は「年譜稿(二)」に述べた通り九女八と関わりがあり、九年四月一日には九女八と共に「女産教授所・女歌舞妓所建設嘆願書」

を東京府に提出している。右の「白拍子座」がどういう形態の建物か定かではないが、寄席などでの「白拍子」「白拍子舞」の興行は明治十一年から十二年にかけてしばしば見られる(『明治の演芸(二)』参照)。新橋外の寄席木村亭でも、白拍子女舞の興行が官許になり、十一年三月二十八日が初日であったという(四月五日付『有喜世』)。出演者は藤村鶴枝(12)、同吉次、同直吉。囃子方まで全員女性で、女方は鬘を用いるが立役は用いず、頼朝や義経役は烏帽子を被り、すべて「往昔(13)の男舞をかたど」ったものという。

白拍子舞や「綱渡りの所作事」の興行に関し、出願人として本所緑町に住む羽賀茂七という人物がしばしばみえる(十一年四月十八日付『かなよみ』、八月二十二日付同紙、十二年一月二十五日付『朝野』など)。ほか、根岸金杉村の元三島神社前に建築された女芝居の「初音座」は、十一年十月十八日に初日を迎え「詮唐西遊記」「京鹿子娘道成寺」が上演されたが(出演者不明、『劇場新報』二号(七月十三日)、十二号(十月二十一日))、「綱の上の踊り」と称して興行をしたのが演劇類似と見做されて頭取が拘引されたという(十月二十四日付『東京絵入』)。東京府・警視庁はもともと寄席における演劇類似の興行を厳しく取り締まっていたが、十一年十一月十九日には、「白拍子・吾妻狂言・綱渡り・曲馬・軽業の類」について、演劇類似の所作を為す者は興行を差し止めることを、警視本署が各分署に達した(『明治の演芸(二)』、十一月二十日付『東京絵入』)。このころ、「白拍子」「白

拍子舞」といった名目で、ひそかに女芝居が行われていたことがうかがえる。

▽四月五日より二十九日カ 四谷荒木町・桐座 二月に続き、名古屋の女役者にて興行。

絵本番付あり（演博所蔵、ロ2317-248ほか⁽⁷⁾。日付は明治十一年四月五日）。初日は四月七日付『有喜世』による（四月十五日付『かなよみ』では、初日は六日）。千秋楽は四月二十八日付『東京絵入』による。

「館模様岩尾初桜」「双蝶全曲輪日記」「だんまり（西南戦争物）」、中幕「けいせい反魂香」、大切浄瑠璃上の巻「桃花節会鶏勝鬨」下の巻「庭神楽雲井曲鞠」。

岩藤・濡髪長五郎・西条武盛・吃の又平Ⅱ篠塚力枝、お初・放駒の長吉・安浦Ⅱ市川小光、尾上・お関・山端・お徳Ⅱ篠塚大吉、江戸平・吾妻Ⅱ坂東辰次、求女・山崎屋与五郎Ⅱ篠塚力代、土佐将監Ⅱ浅尾花重、その他省略（絵本番付）。

□値下げの上、名古屋から二、三名の女役者が加入（四月七日付『有喜世』）。四月五日付『かなよみ』、四月十日付『読売』に広告が出され、値段について明記されている。それによれば、棧敷七十五銭（一人十五銭）、高土間六十五銭（一人十三銭）、平土間五十銭（一人十銭）、大土間一人五銭、御菓子一人三銭、御茶土瓶一人五厘、極上御弁当一人前一朱、口取肴一人前一朱、附肴一人前一朱、御鯔一人前三銭五厘、御敷蒲団一人前六厘、御蓑盆一

人前五厘、「御弁当御持参御勝手次第」。

四月十五日付『かなよみ』では次のようにある。

一番目鏡山は都て女計りの役ゆゑすつぱりとはまつたせいか何れも評判よく、中幕の吃又と鹿兎島的一幕は当時の人気を取た趣向、二番目の双蝶々大切の浄瑠璃は娘連出語の常磐津は別嬪揃ひでひとしほ目前が替り、今度は茶屋や出方の悪弊もなく直段も安いゆゑ見物の足どりもよく中々な大入

四月二十一日に、大切の鶏合の所作事でせり出しの途中で綱が切れ、大吉、力代、辰次の三人が一度に奈落に転落する事故があったが、幸い怪我はなかったという（四月二十四日付『東京絵入』）。また、四月二十八日に千秋楽の予定が、一日延期し、団十郎、菊五郎など新富座の役者が見物に行くという噂があったが（四月二十八日付『東京絵入』）、実現したのかは不明である。四月二十三日付の『有喜世』は、この桐座の興行はかなりの損失とし、五月八日付の同紙はさらに、金主と女役者との間に悶着があったと報じた。

●六月一日より 九女八、四谷荒木町・桐座に出演。図1参照。

絵本番付あり（演博所蔵、ロ2317-253）。初日は絵本番付より⁽⁸⁾。

「仮名手本忠臣蔵」、浄瑠璃「積恋雪関扉」。「忠臣蔵」は二・八段目を除く。また、十段目は、役名から考えて明治六年十一月村

山座初演の「忠臣いろは実記」からとつたものか。
由良之助・清水一学Ⅱ九女八（岩井衆八）、師直・平右衛門・関
兵衛（大伴黒主）・本蔵Ⅱ篠塚力枝、判官・勘平・力弥（七段目
以降）Ⅱ市川小光、かほよ・戸無瀬Ⅱ篠塚大吉、若狭之助・九太

図 1-1 明治 11 年 6 月 1 日桐座絵本番付〈2 丁裏～3 丁表〉（早稲田大学演劇博物館所蔵 口 23-17-253）

夫・丈左衛門Ⅱ佐登吉、お軽・お石・姉おせき・与茂七・墨染Ⅱ
芝佐吉、力弥（四段目）・定九郎・小浪・小町姫Ⅱ坂東辰次、少
将宗貞・三右衛門Ⅱ力代、弟与一郎Ⅱ佐久吉、その他省略（絵本
番付）。

図 1-2 図 1-1 のつづき〈3 丁裏～裏表紙見返し〉（早稲田大学演劇博物館所蔵 口 23-17-253）

■これまでの篠塚力枝一座に、九女八らが加入した。全幕出揃いは六月十二日（六月十三日付『かなよみ』）。

四谷の桐座女芝居は今度評判の岩井久米八が加入して大入の様子、由良之助が久米八で、判官の市川小光も余程上出来、しかし篠塚大吉のかほよ御前は顔が余り悪る過ぎるし坂東辰次の定九郎はいかにも美しく過ぎると云ひ升。（六月四日付

『朝野』）

右のように、九女八の由良之助、小光の判官のほか、力枝の関兵衛も「大出来」とされ（六月十一日付『有喜世』）、評判が良かったようである。しかし、楽屋には色恋沙汰での内紛があったとも報じられている（同前）。女性の観客は少ないとの報道もあった。

四ッ谷桐座の女芝居は大造入りが多く、女にしては実に能く出来ると云ふ評判、毎日わい／＼と詰め掛けれど、後家や娘は気受け悪しく、男子の十分の一も往くものが無いとの事、して見れば芝居も全く色気で持つと見ゆると陸津抜太と云ふ先生から投書。（六月十九日付『朝野』）

▽六月二十六日より 芝新堀町・栄升座で女芝居。

辻番付あり（東北大学狩野文庫所蔵、日付は明治十一寅年六月廿三日）。初日は六月二十七日付『東京絵入』より。

「銘全伝抜抄文庫」、そのあかつきうきなよこぐし「其曉晨浮名横櫛」、中幕「歌舞妓新十八番の内」さきかげんべいにつじ魁源平躑躅 蓮生物語のだん」、浄瑠璃上の巻「蝶衛畧雛形」、下の巻「仕入絵団扇」。

千崎弥五郎・矢間喜内・金兵衛・曾我の十郎岩井金太郎、大星由良之助・寺岡平右衛門・蝙蝠安・曾我の五郎政吉、矢間重太郎・平右衛門女房おきさ・切られお富米花ほか、衆重、君駒、梅枝、亀治、福吉などの名前が見える（辻番付）。

□茶屋の前に花菖蒲を植えたという（六月十九日付『かなよみ』）。女役者たちの出自は不明。切られお富などを演じた米花は、九女八の高弟という岩井米花か（明治四十二年十二月十一日に五十四才で死去、四十二年十二月十三日付『読売』）。

●七月十四日より 九女八、桐座に出演か。

番付未見。初日は七月十七日付『有喜世』より。

「復讐天下茶屋村」（玄蕃ころしより人形屋幸右衛門宅の場、同じく返し京屋店の場まで六幕）、中幕「歌舞妓十八番の内 勸進帳」、二番目「白浪五人男」（浜松屋みせの場から山門まで三幕）（七月九日付『東京絵入』）。

安達元右衛門・人形屋幸右衛門・弁慶・弁天小僧九女八（衆八）、安達弥助・京屋万助・富樫左衛門米花、早瀬源次郎・葉末・義経琴紫、東間三郎右衛門・日本駄右衛門衛門、早瀬伊織・赤星十三郎芝佐吉、染の井・浜松屋番頭登茂次、腕助・南郷力丸佐登吉、忠信利平・浜松屋幸兵衛若駒、浜松屋宗之

助Ⅱ佐久吉（『配役総覧』）。

■九女八が安達元右衛門を勤めたはずが、七月十七日付『有喜世』では、「力枝がお箱の元右衛門を出す」とある。実際に九女八が出演したのかどうか不明である。「勸進帳」は、団十郎以外の役者が演じた場合にしばしば問題となった演目である。たとえば、初代市川猿之助（のち二代目段四郎）は、明治七年一月に中島座で、「勸進帳」を師匠九代目団十郎に無断で演じて破門されたとい^⑩う。九女八は、弁慶を九代目団十郎よりも多く演じたと言^⑪い、「勸進帳は死にました黙阿弥サンに教へて貰ひました」と述べている。この時点で「勸進帳」が演目として挙がっていることに注意しておきたい。

●八月、九女八は高崎へ出掛けたか。

■八月十八日付『かなよみ』に以下のような記事がある。これによれば九女八は養父と何らかの関係があり、「元」という夫を得てから家庭がおさまらないという。「年譜稿」（一）・（二）で述べたように、九女八は母の再婚相手である吉田八十八に言い寄られて困っていた。また、糸八が結婚した相手は守住新作であるが、狂言作者としての名は藤基輔であり、以下の記事に言う「元」とは、基輔の「基」ではなからうか。ただし、記事には「頭取」とあり、狂言作者とは異なる。守随憲治「伝聞記（一）」に言うように、九女八の家庭にはさまざまな困難があったようである。また、この記事の通りであれば、高崎での興行はなし得なかったことにな

る。

小野小町か照手姫かと云ふ程でもないが、美貌も芸もよい女俳優岩井糸八は、養父と何だか訝しいといふ評判も有るせいか、四ッ谷桐座の頭取で元とか云男を亭主にしてから兎角家が納らず、紛紜と暮してゐるうち、同座は先ごろ楽に成つたがチト矢釜しい借金が有るので公晴て他へ出る訳にも行かないが、出なけりや喰ふに困る所から、此間四ッ谷の家を怪談の焼耐火、泥んくで跡をくらし、飛去の鳴り物で上州高崎へ中乗と出掛、彼の地で一番敵く気だから跡の連中にも出掛て来いと度々東京へ郵便を出しても、外の者も先が何だか知れぬゆゑ迂濶とは行かず、糸八もひとり法師では金主も附ず、着た所が芝居は出来ず、ハア堂したら宜らふと思案に暮て道具廻ると四ッ谷住居の世話野台、糸八が居なく成たは元が洒楽に相違ないと、髻をとらへて親父の嫉妬（ヲツト）矢釜しく云ひ出すので元的も勃然として上州へ戻しに出掛る所ろで幕に成つたが此大詰はだうなるかと見功者連の評判記。

▽九月八日より 芝新堀町・栄升座で女芝居。

番付未見。初日は九月二十一日付『市霸威』。演目と配役は『上演年表』『配役総覧』により、演目の読み方と役者の氏名は九月二十一日付『市霸威』による。

「力士競一対侠客」(「明石と仁王」)、「川中島勝利山本」(「輝虎配膳」)、「契情鑑館莫子描」(「傾城鏡山」)。

朝霧・岩藤 西川政吉、丈之助・輝虎・半兵衛 市川小新、おすま・白妙・尾上 篠塚力代、仁王・市郎兵衛・直江・麦庵・左膳 松賀亀司(次)、藤兵衛・主税 中村佐登吉、明石・お勝・初菊・伊太八 中村芝佐吉、その他省略。

□「存外の大出来にて大造客が有ると云ふ評判」(九月二十一日付『朝野』)。九月二十一日付『市霸威』では、大切浄瑠璃として「雨後涼岸波」(「流灯会の浄瑠璃」常磐津連中)も記される。

▽十月四日より 芝新堀町・栄升座 狂言替わり 番付未見。十月七日付『市霸威』より。

「東山桜草紙」、「神有月色世話事」(役割不明)。

□今までの役者が四、五人病気で休んだが、中村芝佐吉始め一同が奮闘(十月七日付『市霸威』)。十月十日付『市霸威』では、この後の興行には愛知県名古屋から「上等の女俳優」を呼びよせ、東京と合併して「女俳優の大芝居」にするつもりだが、未だ九女八も旅行中であり名古屋の連中も揃わないので、到着まで休業してはいけないと今迄の東京連で興行中、との記事がある。次の狂言についても記載があり、十月二十五日よりの興行の演目と一致する。

●十月二十五日より 九女八、芝新堀町・栄升座に出演。

番付未見。初日は十月二十六日付『東京さきがけ』より。

「恋女房染分手綱」、「松竹梅結願懸額」(八百屋お七、「お土砂」)、「戻り駕」(『上演年表』『配役総覧』)。役割不明。

■三代目沢村田之助の姉で、助高屋高助の妹である奥田おてうが沢村寒菊の名で初出演し、朝顔日記宿屋の段で御目見得、小姓吉三も勤めたという(『近代日本芸能年表』三九頁、十月二十五日付『有喜世』)。なお、奥田おてう(記事により「おむら」とも)は、子供の頃から踊りがよくでき、九女八に女役者になることを勧められたといい、そのことを報じる記事には「東京女俳優の隊長岩井糸八」から勧められたとある(八月九日付『有喜世』)。この時点で九女八は「隊長」と表現されており、女役者の中での位置付がうかがえる。この興行には名古屋から市川小松・嵐小寅が加入したという(十一月十九日付『有喜世』)。なお沢村寒菊について、明治十二年九月十一日付『安都満』は、この出演は思惑通りにも当たらなかった、と報じている。

●十一月二十八日より 九女八、芝新堀町・栄升座出演。

番付未見。以下、初日、演目、配役とも、『上演年表』『配役総覧』による。

「荻萱桑門筑紫幞」、「恋飛脚大和往来」、「姫山姥」。

橋立 九女八(糸八)、監物太郎・亀屋忠兵衛・孫右衛門・坂田藏人 小松、治右衛門・お歌 政吉、新洞左衛門・八重桐 芝佐吉、夕しで・梅川 辰次、女之助・義弘・おえん 力代、丹波屋

八右衛門・太田十郎〓佐登吉、牧の方〓佐久吉、桜木〓銀之助、忠三郎嬢〓小寅、沢瀉姫〓政八、白菊〓鉄菊。

■九女八は「菴萱桑門筑紫轢」における監物太郎の妻「橋立」一役である。「姫山姥」で坂田時行の妹白菊を演じた「鉄菊」とは、前興行に出演した「沢村寒菊」と思われる。

○明治十二年（一八七九）三十四〜三十六歳

九女八の動向は四月まで不明。

▽一月八日より 本所緑町・寿座にて女芝居。

絵本番付あり（演博所蔵、口2317263、日付は明治十二年一月八日）。初日は絵本番付による。

「奥州安達原」（おうしゅうあんだがはら）、「御伽草紙百物語」（おとぎぞうしひゃくものがたり）、中幕「対面」、大切浄瑠璃（しんがら）「忍夜恋曲者」。

善知鳥文治・貞任・岩手・曾我の五郎・桑名屋徳兵衛・新居の彦五郎・十兵衛・光圀〓鶴枝、宗任・鎌倉権五郎・工藤祐経・中川右膳〓か〓衛門、袖萩・恋絹・大磯の虎・峯吉・滝夜叉〓富士仙、お谷・八幡太郎・新羅三郎・曾我の十郎・姐己のお百〓か〓吉次、浜夕・舞鶴・お熊〓か〓直吉、儼杖〓梅吉、生駒之助・化粧坂の少将〓佐久二、敷妙〓寿之次、お君・環宮〓清吉、片田金五郎〓仲次、秋田小僧重吉〓か〓金八、その他省略（絵本番付）。

□十二年一月四日付『安都満』によれば坂東鶴枝・同吉次・同直吉・柏木衛門・中村富士松ら、初日は一月五日（『近代日本芸能

年表』上、四十頁参照）。鶴枝、吉次、直吉は『安都満』では坂東姓で記載されているが、十一年四月に新橋外の寄席木村亭に出ていた藤村姓の三人か。

▽一月十六日〜二十日 芝新堀町・栄升座にて女芝居。

辻番付あり（演博所蔵、口226342、日付は明治十二年一月七日）。初日は一月十七日付『安都満』、千秋楽は二月四日付同紙による。

『近代日本芸能年表』四十頁。

「魁曾我西国白縫」（さきがけそがづくしのしらぬい）、浄瑠璃上「（曾我の対面）」（さきがけそがづくしのしらぬい）、下「蝶衛開化盃」（ちょうえいかい化盃）。

鳥山豊後之助・漁師鱸九郎・鷺津の七郎・雪岡多太夫・鬼王新左衛門〓岩井金太郎、雪岡冬次郎・若徒真平後に漁師浪六・鳥山犬千代後に秋作照忠・曾我の五郎・豊年踊り・頼朝公〓政吉、青柳春之助・若菜姫・秋篠・工藤祐経〓芝佐吉、菊池貞行・鷺津の六郎・亀谷多門之助・曾我の十郎・まい玉売り〓清吉、七草官丁礼・大友刑部宗連・漁師鮫藏・近江の小藤太〓佐登吉、その他省略（辻番付）。

□座頭は西川政吉、「奴風」にて岩井佐登吉が宙乗りをしたという（二月十一日付『安都満』）。対面の場では五人の芸者がほめ詞を述べたようだ（一月二十九日付『郵便報知』）。場所がよくないため客足が少なく、芝神明富士仙問の境内へ移転願いを出したという（一月二十五日付『東京絵入』）。

図2 明治12年4月15日桐座辻番付(早稲田大学演劇博物館所蔵 口22-63-46)

図3-1 明治12年4月16日桐座絵本番付 「噂高橋姦婦小伝」の部分<1丁裏~2丁表>(早稲田大学演劇博物館所蔵 口24-13-120)

図3-2 図3-1のつづき<2丁裏～裏表紙見返し>(早稲田大学演劇博物館所蔵 口24-13-120))

● 四月十六日～五月十三日カ 九女八、四谷荒木町・桐座へ出演。
図2・図3参照。
辻番付(演博所蔵、口22-63-46)、絵本番付(演博所蔵、口18-28-2A、口23-9-6、口24-13-120、全つ同版)。初日は四月十七日付『東京』、千秋楽は五月十三日付『かなよみ』による。『近代日本芸能年表』四二頁。
「伊達競阿国戯場」、「噂高橋姦婦小伝」四幕、浄瑠璃「二人道成寺」。
仁木弾正正則・俳諧師其角実は土手の道哲・沼田の家老室カ瀬丹右衛門・浪之助女房お伝・渋谷小左衛門Ⅱ九女八(岩井衆八)、足利頼兼・政岡・細川勝元・尚古堂松斎・差配人重郎兵衛カⅡ市

図3-3 図3-2のつづき<裏表紙>(早稲田大学演劇博物館所蔵 口24-13-120)

川小松、絹川吉蔵・八汐・鬼清吉・判人善六・巾着切鎌鼬市松
清吉、渡辺民部・栄御前・高橋浪之助・土方人足七助力代、傾
城高尾太夫・沖の井・源次女房おとり・道落者正莉の金太辰
次、男之助妹松島・土方人足隣蔵・合長屋の女房およし・新造高
綾鈍菊、その他省略。

「一人道成寺」は岩井清吉・沢村鈍菊・市川小松・坂東辰次・岩
井糸八（辻番付）。

■上野国利根郡下牧村（現・群馬県利根郡みなかみ町）出身の高橋
お伝は、明治九年八月二十七日に浅草蔵前の旅籠屋丸竹で起きた、
古着商後藤吉蔵殺人事件の犯人として逮捕され、明治十二年一月
三十一日に処刑された。明治期のいわゆる「毒婦」として最も有
名な存在である。斬罪ののち、各新聞はこぞってお伝の話を報じ
た。また、お伝を題材とした合巻がほぼ同時期に出版された。す
なわち岡本勘造（起泉）著・吉川春涛関・桜齋房種画『其名も高
橋毒婦の小伝 東京奇聞』（全七編、明治十二年二月～四月、島
鮮堂刊）と、仮名垣魯文著・守川周重画『高橋阿伝夜叉譚』（全
八編、明治十二年二月～四月、金松堂刊）である。四月の桐座の
公演は、どこよりも早く高橋お伝を劇化上演したものである。五
代目尾上菊五郎がお伝を演じた新富座の「綴合於伝仮名書」（河
竹黙阿弥作）は、桐座より約一か月半遅れ、五月二十九日が初日
であった。ドラマ・ヴァレリー氏の平成十年度歌舞伎学会秋季大
会における研究発表「明治期歌舞伎における毒婦造型——『樽高橋
姦婦小伝』『綴合於伝仮名書』を中心に——」（一九九八年十二月

十三日、於共立女子大学、発表資料B4版計七枚）は、岡本起泉、
魯文の合巻と、桐座、新富座での劇化について比較検討したもの
であり、本稿においても多大な恩恵を受けている。桐座の上演内
容が新富座に比較してどういふものであったのかは重要な論点で
あるが、詳しく検討する準備がないため、ここでは論じないこと
とする。

台帳は、ドラマ氏が指摘しているように、中西貞行発行の活字
本『演劇樽高橋姦婦小伝』（明治二十九年三月刊、国立国会図書館
所蔵）の中に二幕目までが収められている。頭書は役名である。
また、演博に「明治十四年初夏吉辰」の年記がある再演の台帳が
所蔵されている（ロ16761）。活字本と再演台帳の内容は、ドラ
ム氏によればほぼ同じとのことである。『上演年表』によれば、
確かに明治十四年六月に浄瑠璃座で九女八一座による「高橋おで
ん」の興行がある。内容の詳細な検討は後日とするが、台帳は写
本、横本一冊、全部で五冊の台帳を合綴したもので、各表紙に「明
治十四年初夏吉辰／其名高橋毒婦伝／本主 西川仲次」とあり、
場名が記される。頭書は役名。表紙等を含めない本文は全部で
七十丁半。場割は『演劇樽高橋姦婦小伝』によれば以下の通り。大
序「上野国下牧村高橋内の場／同梁田在藤川村幸正寺の場／同尚
古堂筆学所松齋内の場／同村境庚申墳松齋殺しの場」、二幕目「源
次住居身売の場／甲州柳町桜屋の場／信州路金沢峠の場／台ヶ原
駅安泊の場」、三幕目「甲斐国山道谷間の場」、三幕目「横浜野
毛町裏川岸の場／同花咲町於島住居の場／同裏長屋浪之助借家の

場／同太田村赤門寺門前の場／同三途川於欲住居の場」、四幕目「築地寒さ橋待合茶屋の場／浅草蔵前旅籠屋の場／新栄町馬場先の場」、大詰「裁判所言渡し場の場」。絵本番付の場割とほぼ同じであるが、大詰は、絵本番付では「大切 市ヶ谷御仕置之場」とあり、処刑の場面となっている。

九女八のお伝の演技がどんなものだったのかは未詳だが、芝居の評判は良かった（「例の女俳優の高橋お伝が評判よく大入であります」（『劇場新報』二十七号〔五月五日〕）。「伝聞記（一）」によれば、次のようにある。

糸八さんのお伝は大変な評判で大入だったのです。尤、團十郎の口上番附もあつたから、それで人気をとつたのだらうともいふことでした。

「團十郎の口上番附」は『歌舞伎新報』（十一号〔四月二十六日〕）にも見え、四月十三日付『かなよみ』には「旧縁によつて團十郎が口上看板を書き」とある。また、四月十七日付『安都満』では「又市川團州が師弟の因でお礼の口誼も有升から、諸客行てお遣なさい」とある。「旧縁」や「師弟の因」とは誰のことなのか。姓の同じ市川小松のことか。図2の辻番付の左端に「乍憚」という文字と口上の一部が見えるが、残念ながら切れている。この部分に九代目團十郎の口上があつた可能性がある。團十郎の口上まで用意したのだとしたら、相当に力を入れて準備した興行であつたと

言えよう。また、仮名垣魯文による「仮文記珍報 劇場客物語」の「客物語第一齣 劇場を丸呑にする眼張入道」（『歌舞伎新報』十二号〔五月三日〕）には次のような部分がある。

オット離れた、四ツ谷の桐座からも岩井糸八がわざ／＼桜田治助を使ひによこして、今度の高橋お伝を是非見て呉ると請待されてゐるが、女芝居の見物も大人気ねへからはもお止せ

「眼張入道」が誰を指すかは不明だが、劇通を風刺したものかと思われる。実際に右のような事実があつたのだとしたら興味深い。この桜田治助は四代目である。治助は明治九年までは狂言作者として新富座に勤めていたが、この時期、『市霸威新聞』、『諸芸新聞』（十三年創刊）の編集をしている。桐座の興行にも関わっていたのかもしれない。また「女芝居の見物も大人気ねへ」という、女芝居に対する見方の一端もうかがえる。すなわち、女芝居をまともな芝居としてはみなさない態度である。

ところで、再演台帳の中に、当時の九女八についてうかがえる楽屋落ちを見つけたので引用する。三幕目「太田町三づ川の場」で、お伝の愛人鎌鼬の市松（「市」と表記）とお伝とが話している場面である。「四ツ谷の芝居」が出て来るので、ここは初演台帳の写しと思われる。初演においてお伝は九女八、市松は清吉が演じている。

でん 市さんおまゑも芝居が出来るのかへ。

市 そふじやアねへが、おれも芝居が好きだから、ほうぐ(行)えいつて見るのよ。

でん 夫じやア東京の四ツ谷の芝居も見にお出だろふね。

市 此間おれが見にいつた時はまだはしまらなかつた。

でん 此頃はじまつたといふ事だから、私も見に行たいけれど、大きらいナ役者が有から。

市 そふしておめへだれがきらいだ。

でん あの衆八といふ役者がサ。

市 おめへはきらいか。おれは大ひいきだぜ。

でん あんなものヲ。

市 あんナ物といつて女役者じやア東京ひろしといふか日本（非）国中で女はいゆう（非）の市川団十郎だぜ。

でん なり田屋とくらべ物になる物かね。

市 そりやアそふだろふが、たとへにいつたのよ。

でん 夫でもふだん病しんで、わづらつちやア出ないから、いやナ役者サ。

市 そりやアもつたる病、じぶんのすきでわづらいもしめへ。

せい（清）しよ（正）ふ（公）こうのよふな人でも病イにはかなわねへ。

でん それはどふでもい、けれど、久しく芝居も見ねへから、つれていつて見せておくれな。

市 ぜひ此頭につれて行から、たのしみにしていねへ。

でん ほんとうかへ、うれしいねへ。

「白浪五人男」の浜松屋の場で、お嬢様に扮した弁天小僧が鼠員の役者を番頭に問われ、自分自身のことは「大嫌いじゃわいなあ」と言つて笑いを取るのと同じ趣向の場面である。ただ、この場面で九女八は「女俳優の市川団十郎」と言われている。前出四月十七日付『安都満』には「今度は三府第一等の女俳優岩井衆八、市川小松を始め、東京名古屋有名の者が新狂言を取仕組」とある。のちに「女団洲」と、九代目団十郎に譬えられ賞賛された九女八への見方がここに見られるのである。また、傍線部のお伝のせりふからは、九女八が病気のために芝居を休むことがあったことがうかがえる。消息が追えない時期の九女八は病に苦しんでいたのかもしれない。

●五月十五日以降、日不明 九女八、横浜羽衣町・下田座佐の松に出演。

番付未見。日にちの推定は五月十二日付『東京』による。

「高橋お伝」。

お伝Ⅱ九女八（衆八）。

■岩井衆八の高橋お伝大入り。「金方は大儲け」（五月二十二日付『かなよみ』）。

●六月三日より 九女八、横浜羽衣町・下田座佐の松に出演。番付未見。六月三日付『かなよみ』による。

「四ツ谷怪談」、「七変化の所作事」。

お岩・小平・与茂七 九女八（糸八）、七変化は小松と清吉による。

■九女八は外国人にも好評で、座敷に招かれたという。

難でも女でなければ助倍連をとり留る訳には行ません。（中略）取わけて糸八が女振に赤鯰（外国人）が替るべく楽屋へ入り込、弗銀の纏頭を蒔ちらし大当込みで、打出すと芝居前の紀の国や大万、武蔵屋あたりから引も切ずに口がかかり、赤髯の鼻下長者が頻りと招ぐが糸八もさる者、殊に外国人のお座敷へは一切出ないと、お遣ひもの、胡麻菓子で追ばらひゆゑ、殊に実入は充分で金方も損なし（六月三日付『かなよみ』）

桐座の次期も決まっていたようなのだが、結局九女八は桐座には戻らなかった。噂されていた狂言は、「由井正雪」と「伯円子が作の合巻伊香保土産の関口文七」（五月十三日付『かなよみ』）、「天神記」（五月十六日付『読売』）、「天神記」と「浄瑠璃三ツ人の引拔」（五月十六日付『東京絵入』）、「熊野靈験小栗街」と「菅根靈現覽仇討 菅根山の段」（六月十四日付『有喜世』）。しかし何か悶着があり、結局実現しなかったという（六月十八日付『安都満』）。

●九月 九女八、山梨県甲府桜町・三井座に出演か。

番付未見。『歌舞伎新報』三十四号（九月十四日）。

「菫萱」、「八百屋お七」（役割不明）。

■同じく甲府の亀屋座で、市川団升の一座が一番目に「ひらがな盛衰記」、二番目に「和国橋の藤次」を上演、また一條町では尾上芙蓉と尾上尾上右衛門が「菫萱の山の段」「柳沢」「千両のほり」を上演、「然し糸八の外は見物不入との報知あり」（『歌舞伎新報』三十四号）。ただし、甲府の新聞『峡中新報』七月〜九月分に九女八の公演の記事は見当たらず不審。さらに調査を要す。三井座は三井与平によって甲府桜町二丁目（現・甲府市中央一丁目）に建設され、明治九年八月に開場した芝居小屋である。甲府では江戸時代以来、亀屋座が有名であったが、三井座の舞台開きには四代目中村芝翫や五代目尾上菊五郎らが出演し、亀屋座に遜色のない劇場であった（福岡哲司『近代山梨の光と影』山日ライブラリー、二〇〇六年、一七五―一九五頁参照）。九月以降の九女八の動向については未詳。

【付記】

図版の掲載をご許可いただきました早稲田大学演劇博物館に深謝申し上げます。新聞紙・雑誌の閲覧に関し、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）および国立国会図書館に御礼申し上げます。

注

- (1) 「年譜稿(二)」発表後に、倉田喜弘氏より、明治三十三年三月の『時事新報』に「女優市川九女八」と題する九女八の談話が連載されたことをご教示いただいた(三月四、五、九、十、十二、十四、十六日付同紙)。お狂言師のことや、旅芝居での出来事、「道成寺」「関の扉」「勧進帳」などについての芸談が語られた貴重なものである。今後参照していくこととしたい。
- (2) 調査対象とする新聞紙については倉田喜弘『明治の演芸(二)』(国立劇場調査養成部芸能調査室、一九八一年)を参考にした。
- (3) 「年譜稿(二)」では九女八の生年を一八四四年から一八四六年ごろと推定した。そのため、九女八の年齢の表記にゆれがある。
- (4) 民谷(小川)弥平太のお岩稲荷に関しては何かと問題がありしばしば報道されている。十一年六月十一日付『東京曙』、十一年七月二日付『有喜世』ほか。
- (5) 藤村鶴枝(1859?)は藤間流の流れを汲む踊りの藤村派の家元で、明治後期まで女役者として活躍している(杉浦善三『女優かゝ美』杉浦出版部、一九二二年)。同書によれば吉次は妹という。鶴枝は十六歳(明治四年か)から一座を組織し座頭となり実父が太夫元となって全国を廻ったという。『芸能の文明開化』三三〇―三三一頁には、明治十三年三月、鶴枝らが神奈川県南多摩郡一ノ宮村(現・多摩市)の小野神社で興行した時の詳細が述べられる。
- (6) 羽賀茂七は、明治九年から十年一月にかけ本所緑町にあった官許劇場常盤座の座主をしており(演博所蔵「明治十二年各座書上」イ13-145c)、芸者堀の小方(おみつ)と何らか関係があった(十一年三月九日付『有喜世』)。おみつは「島原の座元」(新富座座元守田勘弥か)にも頼んで「東京女演劇の太夫元」を願っていたという(同紙)。おみつの弟は、九女八ら女役者の旅芝居の座元をしていたという(『芸能の文明開化』

三二六頁参照)。

- (7) 絵本番付に異版あり。演博所蔵ロ23-13-2Aおよびロ23-13-2F。Fの二点は同版で、日付は明治十一年四月三日、内容は変わらないが場面の順番がロ23-17-28と異なる。
- (8) 五月三十日付『朝野』には「今三十日より始まり」とある。番付の日付をとった。
- (9) 小宮麒一氏『上演年表』には、「他に資料の無い興行にのみ記載」とされる「国立劇場所蔵辻番付複写」が典拠として掲げられる。以下、『上演年表』を参照した明治十一年の栄升座の興行に関しては同様。この資料は未見。
- (10) 拙著『歌舞伎の幕末・明治―小芝居の時代―』(べりかん社、二〇一〇年)、一八六頁。
- (11) 注(1)前掲「女優市川九女八」(十一)(明治三十三年三月十日付『時事新報』)。
- (12) 『東京新聞』でも連載された。十二年二月一日〜五月六日。
- (13) 五月十二日付『東京』には「序幕の藤川村庚申塚の場、お伝が尚古堂松斎の殺しは中々の大出来」とあるが、やはり演技の詳細はわからない。
- (14) 四代目治助について、前掲『歌舞伎の幕末・明治』一八一―一八二頁に述べた。
- (15) 第三幕目の冊子のうち、本文十五丁裏に記載された部分。